

# 中国朝鮮族の二言語使用について

金 春 香

キーワード: 二言語習得、中国朝鮮族、助詞の使用、L2の影響

## 要 旨

本研究では、バイリンガルの言語使用に注目し、中国朝鮮族、特に、2言語教育が盛んに行われる延辺朝鮮族自治州在住の中国朝鮮族を対象に、L2(中国語)を習得することによって、L1(朝鮮語)の使用にどのような影L2の影響だと予測される御用を産出する傾向があり、調査対象の学年が進むにつれて両言語の認識力も進み、誤用も少なくなる。更に、イマージョンクラスの場合、高学年に進むにつれて、習得は進むものの、4、5年生で非文産出が多い。

## 1. はじめに

本稿は、バイリンガルの言語使用の観点から中国延辺朝鮮族の中国語習得と朝鮮語習得を観察し、延辺朝鮮族自治区の二言語使用の現状を探る。

中国には、漢民族以外に55の少数民族が存在し、その人口は、中国総人口の約8.41%を占める<sup>1</sup>。長い歴史の間、漢民族文化との接触により、その言語と文化を失った少数民族も当然ながら存在する。しかし、多くの民族が自らの言語と文字を所有し、その数は、言語80種類以上と文字39種類に上り、21民族が今でも自分の文字を持っている(市瀬 2000)。朝鮮族もその中の1つの民族である。

中国朝鮮族は、朝鮮半島から中国に移住して150年以上の歴史を持ち、現在の朝鮮族は、その第3世代あるいは、第4世代である。主に、中国の東北三省吉林省、遼寧省、黒竜江省と内モンゴルに居住し、その中でも特に吉林省にある延辺朝鮮族自治州は朝鮮族が集中的に生活していて、母語である朝鮮語教育が盛んに行われ、朝鮮族文化がしっかりと受け継がれている地域である。中国人として住みながらも、朝鮮族としてのアイデンティティーをもつ中国朝鮮族に関する研究は意味深く、社会学、民俗学、歴史など、様々な分野の研究者が研究を行ってきた。また、言語学の分野でも、中国朝鮮族朝鮮語に関して中国語からの音韻、語彙借用、文法的特徴、言語使用意識などの問題を取り上げた研究が多く行われてきた。

<sup>1</sup> 中華人民共和国国家統計局(<http://www.stats.gov.cn/>)の2000年のデータを参照。

本稿は、言語習得の視点から、中国朝鮮族がどのように二言語を習得し、バイリンガルになるのかに注目し、L2（中国語）を習得することによって、L1（朝鮮語）の使用にどのような影響があるかについて考察した。

中国朝鮮族は、家庭教育、学校教育、その他個人的な環境などによって多少の差はあるものの、多くの人にとって、L1は朝鮮語である。そして、近所との付き合いや学校での授業などを通じてL2として中国語を習得する。延辺朝鮮族自治州の朝鮮族の児童のための小学校では、朝鮮語に重点をおいた従来の教育から、L2である中国語も同じように使えるバイリンガルを育てるための教育に変化している。1990年から州内7か所の小中学校で、朝鮮語と中国語混用の実験教育が行われた(笠本2003)。それは、学校の教科の授業をL2中心に行うイマージョンプログラムである<sup>2</sup>。イマージョンプログラム (immersion program) とは、L2を用いての教科教育を行うというバイリンガル教育の1つである。カナダのように、広い範囲で二言語が使用されている地域でよく見られる。授業時間の量によって、最初の数年間はすべての教科教育をL2で行うトータルイマージョン (total immersion)、部分的にL2を使用するパーソルイマージョン (partial immersion) などの種類がある(迫田2002)。

中国朝鮮族のイマージョンプログラムの場合、美術、体育、音楽以外はすべて中国語で授業が行われ、担任との会話もすべて中国語で行うことが要求される。従来のプログラムの生徒(以下、普通クラスとする)は、全科目の授業を朝鮮語で受け、毎日1時間ほど中国語の授業を受ける。

本研究では、イマージョンクラスと普通クラスの2年生から6年生の児童の助詞習得を比較する調査を行い、中国朝鮮族がL2を習得することで、L1の使用にどのような影響が及ぼされるのかを考察した。

## 2. 先行研究の検討

金(2009)は、第2言語習得の観点から、中国朝鮮族がL2である中国語を習得することによって、朝鮮語助詞使用に生じる誤用について論じた。金(2009)は、特に中国語の前置詞と朝鮮語の助詞の構造的違いに着目した。2つの言語の統語的特徴を見ると、語と語の文法的関係を表すために、朝鮮語では(1a)の「-을・-를/-ul・-lul/-を」のような助詞が現れ、中国語は(1b)の「-从/cong/-から」のような前置詞が現われ

<sup>2</sup> 延辺朝鮮族自治州では、実験クラスと呼ぶ。本稿では、クラスのタイプによって、L2の中国語で授業を行うクラスはイマージョンクラス、L1朝鮮語で授業を行うクラスは普通クラスと呼ぶ。

る。習得段階にある子供は、中国語の前置詞と朝鮮語の助詞を文法上別のものとして認識できず、中国語の授業で習得した前置詞に対応する朝鮮語の翻訳して誤用(1c)が生じる可能性があるとして予測した。

- (1)a. 남동생 은 유치원 을 졸업 했습니다.      b. 弟弟 从 幼儿园 毕业 了。  
     弟 は 幼稚園 を 卒業 しました。      弟 から 幼稚園 卒業 完了形  
 c. \*남동생 은 유치원 에서 졸업 했습니다.  
     弟 は 幼稚園 から 卒業 しました。

朝鮮語の助詞4種類「-의/-ui/-の」、「-에/-ey/-に」、「-을·-를/-ul·-lul/-を」、「-에/-ey/-に」の使用に上記のような中国語の影響を受けると予測し、朝鮮語文の助詞の部分に穴埋めさせる方法でテストを行った。延辺朝鮮族自治州延吉市の公園小学校3年生から6年生各学年20人ずつに、同じ場所で同じ時間で問題を解いてもらった。テストの回答から誤用例を収集し、分散分析を行って学年ごとの比較と2タイプのクラスを比較した。

調査の結果、中国朝鮮族はL1の使用において、L2の影響を受けていることが明らかになった。L1の助詞使用において、L2の影響だと予測される誤用を産出する傾向があり、被験児の学年が進むにつれて両言語の認識も進み、誤用も少なくなる。また、イマージョンクラスの場合、高学年に進むにつれて、習得は進むものの、4、5年生で特に誤用が多かった。

しかし、金(2009)の結果は、一つの小学校の限られた生徒を対象とした調査結果であり、更なる裏付けが必要である。同じ予測で同じ実験を教授法などが異なるほかの小学校で行った場合、同じ結果が得られるのか、また、4年生と5年生で誤用が多いのは、偶然の結果なのか、イマージョンプログラムを導入している延吉市の他の小学校の児童を対象に実験を行った。

### 3. 本研究の調査

本節では、中国朝鮮族の朝鮮語使用における中国語の影響を検証するための実験とその結果を報告する。先行研究で、金(2009)は、第2言語習得の観点から、中国朝鮮族の朝鮮語誤用は中国語を習得することによるものだと論じた。しかし、調査対象と調査結果にいくつかの疑問が残り、更なる裏付けが必要と判断し、本稿では、対象を

変えて調査した。

### 3-1. 調査対象

調査対象は、中国吉林省延吉市中央小学校の生徒200人である。中国吉林省延吉市中央小学校を調査拠点として選んだ理由は、この小学校は、数年前から、バイリンガル教育に力を入れ、積極的にイマージョンプログラムを導入し、現在、各学年に2クラスのイマージョンクラスが設けてあることから、観察しやすいためである。本調査では、この小学校のイマージョンクラス2年生から6年生の児童、各学年20人、普通クラス2年生から6年生の児童各学年20人、合計200人の児童を調査対象とした。イマージョンクラスの児童は、日常はほとんどL1の朝鮮語で生活し、学校ではL2の中国語のみを使用している。普通クラスは、日常は朝鮮語で生活し、学校でも毎日1時間中国語の授業を受ける以外、すべての授業を朝鮮語で受けている。

### 3-2. 刺激文

刺激文は、金(2009)で使用した文と同じ文を使用した。次に、金(2009)で中国語の影響を受けて誤用が生じると判断した予測4つを紹介する。予測1～4では、a:中国語の文、b:朝鮮語、c:日本語訳、d:予測したエラーが現れる文章の順に提示する。

2つの言語の統語的特徴を見ると、語と語の文法的関係を表すために、中国語は前置詞が現われ、朝鮮語では後置詞(助詞)が現れる。習得段階にある子供は、中国語の前置詞と朝鮮語の助詞を文法上別のものとして認識できず、中国語の授業で習得した前置詞を直接朝鮮語に翻訳してしまうのではないかと予測した。現段階では、4つの予測をたてて、実験を行った。

#### (2)予測1

a. 学 了 两个小时 的 英语。

学ぶ 完了 二時間 の 英語。

b. 두시간 동안 영어 공부했다.

二時間(の間) 英語を 勉強した。

c. 英語を二時間勉強した。

d. \*두시간 의 영어를 공부했다.

二時間 の 英語 を 勉強した。

中国語では「-的/de」は所有格を表すが、また補語の前に形式上使われる場合もある。時間を表す補語「三日間」が目的語の前に来るとき、実質的役割は果たさないが、形式上でこの「-的」を使う。しかし、習得段階にいる子供は、朝鮮語で所有格を表す「-의」(~の)と典型的に非常に似ているため、すべての「-的」は所有格を表すと認識し、朝鮮語の使用においても、中国語の所有格を表す際の「-的」をそのまま適応してしまう可能性がある。

### (3) 予測2

a. 我 在 紙 上 画 画。

私 に 紙 上 描 く 絵

b. 나 는 종이 에 그림 을 그림니다.

私 は 紙 に 絵 を 描 く

c. 私は紙に絵を描く。

d. \*나 는 종이 에서 그림 을 그림니다.

私 は 紙の上 で 絵 を 描 きます。

中国語では行為が行われる場所を表す前置詞として「-在/zài/-に、で」を使用し、それに該当する朝鮮語の助詞として「-에」(に)と「-에서」(で)がある。국어문법론강의(2007)(国語文法論講義)によると、「-에」と「-에서」は、両方とも行為が行われる場所を表す所格(locative)という点では非常に似ている。しかし、「-에」は、所格でも、意味上は空間的帰着点と指向点を表す。「-에서」は、例えば、「我在学校学习」(私は、学校で勉強します)のように、行為の行われる場所を表すときに用いる。習得

が充分でない子供は、所格と言う点で似た二つの助詞の差を認識できず、予測2のように、帰着点を表す助詞「-에」(～に)を使うべきところでも、「-에서」(～で)を使う可能性が考えられる。

#### (4) 予測3

- a. 弟弟 从 小学 毕业 了。  
弟 から 小学校 卒業 完了形
- b. 남동생 은 유치원 을 졸업 했습니다.  
弟 は 幼稚園 を 卒業 しました。
- c. 弟は幼稚園を卒業する。
- d. \*남동생 은 유치원 에서 졸업 했습니다.  
弟 は 幼稚園 から 卒業 しました。

中国語では、出発点を表す前置詞として「从」(から)を使用し、それに対応する朝鮮語助詞として「부터」、「-에서」(～から)がある。しかし、「-에서」(～から)は、「오다」(来る)、「돌아오다」(戻る)などの動詞が後ろに来てはじめて、出発点を表す。他動詞の「卒業する」の前には意味的には、出発点を表すものの、対格助詞「-을/를」(～を)を使わなければいけないのにもかかわらず、「-에서」(～から)を使う可能性がある。

#### (5) 予測4

- a. 爸爸 参加 会议。  
父 参加する 会議
- b. 아버지 는 회의 에 참가합니다.  
父 は 会議 に 参加します。

c. 父は会議に参加します。

d. \*아버지 는 회의 를 참가합니다.

父 は 会議 を 参加します。

中国語は基本的に「動詞+目的語」構造をとるが、朝鮮語では、「目的語+助詞+動詞」構造になる。朝鮮語は日本語と同じく、助詞を必要とし、動詞によってそれぞれ格助詞が異なる。対格の場合は、基本的には、「을/를」(~を)を使用する。しかし、「参加する」の前には、所格助詞「-에」(~に)を使用すべきだが、子供は対格助詞「을/를」(~を)を使う可能性がある。

### 3-3. 調査方法

調査は、中国語の文を提示し、該当する朝鮮語文に穴埋めさせる方法で行った。各学年20人ずつ、同じ場所で同じ時間内で問題を解く。次に、実際提示した刺激文を紹介する。1行目の文は、中国語の文で、その次に朝鮮語の文を提示した。予測したエラーが出る場所を空白にする。その下には、空欄を設ける。

下了三天的雪。

사흘( ) 눈이 내렸습니다.

答:[ ]

このような文を四つのタイプのエラーで各6文ずつ作り、フィラー6文で、全部合わせて30文提示する。被験者の年齢と集中力などを考慮して、1枚に6文ずつ載せた。

### 3-4. 結果の予測

中国朝鮮族の児童は、L1の朝鮮語使用において、L2の中国語の影響を受ける。小学校低学年は、朝鮮語の誤った使用が多い。しかし、学年が進むにつれて、2つの言葉の判断力が高まって誤用は少なくなる。また、イマージョンクラスの場合、中国語で授業を受け始めて間もない2年生では、普通クラスとそれほど変わらない結果だが、学年が進むと、普通クラスより中国語との接触量がかなり多いため、影響を受けやすい。

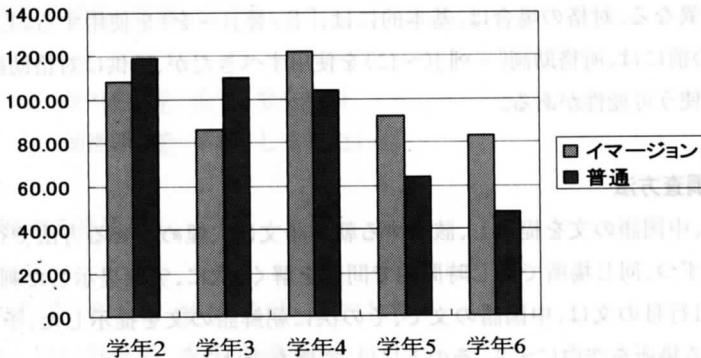
### 3-5. 本調査結果

#### 3-5-1. 実験1

予測エラーの分析1 (各学年の比較)

本稿では、予想されるエラーのみに絞って分析を行った。まず、両タイプのクラスで学年全体の傾向を分析した。

グラフ1:各学年全データのグラフ



注:横軸は学年で、縦軸は解答した問題数である。

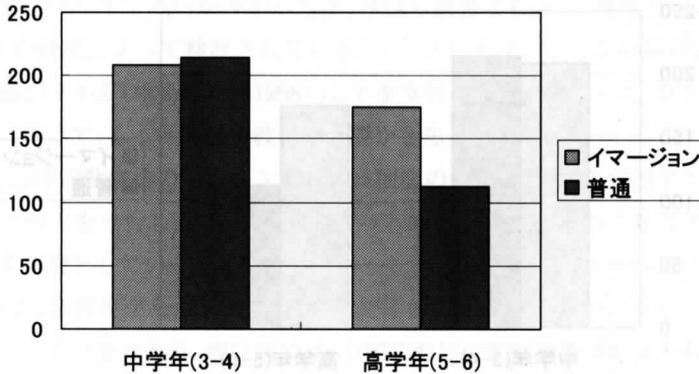
分析1は、学年ごとに予測されたエラー数の減少傾向を分析した。これは予想されるエラーだけに分析を絞ることで、被験者がどれだけ中国語の影響を受けたのかを比較することができるからである。一要因の分散分析を用いて分析(One-way ANOVA)を用いて分析を行った結果、イマージョンクラス、普通クラス共に学年ごとの比較で主効果に有意差が見られ、学年が進むにつれて、予測したエラーの数は減少するという傾向が見られた。さらに学年ごとの比較を行った結果、イマージョンクラス2年生と3年生に有意傾向があり、4年生と5年生に有意な相違が見られ、5年生と6年生は有意差が見られなかった。普通クラスの場合、2年生と3年生、3年生と4年生、5年生と6年生の比較に有意差が見られず、4年生と5年生で有意差が見られた。

分析1は、学年ごとに予想されたエラー数の減少傾向を分析した。その結果、主効果は見られたが、学年ごとの分析により、減少傾向にあるという結果を発見することができなかったものの、各学年の予想されるエラー数を比較すると、明らかに減少して



いるため、分析2として中学年(3年生、4年生)と高学年(5年生、6年生)の2つのグループに分けて分析にすることにした。

#### 予測エラーの分析2 (中学年(3、4年)と高学年(5、6年)の比較)



グラフ2: 各クラス、中学年と高学年の全データのグラフ

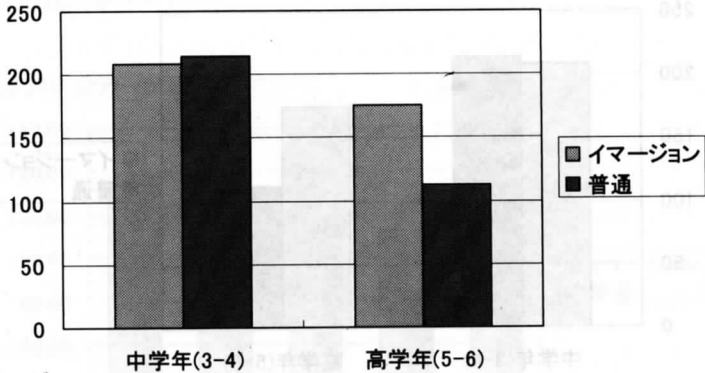
分析2は、3、4年を中学年、5、6年を高学年とし、分析1と同じく、1要因の分散分析を用いて分析(One-way ANOVA)を用いて、イマージョンクラスと普通クラスの学年ごとに予測されたエラー数の減少傾向を分析した。その結果、主効果は見られ、イマージョンクラスの中学年と高学年の比較で有意傾向があり、普通クラスの中学年と高学年で有意差が見られた。さらに、学年ごとに減少傾向にあるという結果を発見した、中学年が高学年よりも予想されるエラーを産出しているという傾向が発見でき、これらは中国語の影響によるものと結論付けることができる。しかし、今回比較したのは各クラス内での生徒の語学力であり、普通クラスの生徒たちは、学校では中国語に触れている割合が比較的少ない。そこで普段から中国語に多く触れているイマージョンクラスの生徒たちと比較することで、中国語の影響がどれほど強いものなのかを調査することができる。下記では、さらなる実験の結果を報告する。

#### 3-5-2. 実験2 (イマージョンクラスと普通クラスの比較)

L2の影響を見るため、L2を常に授業で使用しているコースと、そうでないコースを直接比較することによって、今回の結果をさらに強く裏付けることになると予想

される。よって、次は、イマージョンクラスと普通クラスを比較する実験を行った。比較対象は、中学年と高学年に分ける。

### 予測エラーの分析3（イマージョンクラスと普通クラスの比較）



グラフ3:各クラス中学年と高学年の全データのグラフ(グラフ2と同様)

分析1,2と同じく、1要因の分散分析を用いた分析(One-way ANOVA)を行った結果、主効果に有意傾向が見られた。これは、各クラスと学年ごとに減少傾向が見られるということである。さらなる1対比較を行った結果、イマージョンクラス中学年と普通クラス中学年で有意差は見られず、イマージョンクラス高学年と普通クラス高学年で有意差が見られた。この結果にふまえて、イマージョンクラス、普通クラス共に、学年が進むにつれて予想されたエラーが減少しているということが出来る。また、刺激文間にも違いは見られなかった。これらは、生徒の言語習得が進むにつれて、理解度が進み、中国語の影響だと思われるエラーが減少しているという予測と一致するといえる。

#### 4. まとめ

本調査は中国朝鮮族は、朝鮮語助詞習得において、中国語の影響を受けるという金(2009)の結果を支持する。学年が進むにつれて、両言語の認識力は進み、助詞の使用に受けている影響も少なくなる。普通クラスは学年が進むにつれて、明らかに減少傾向にある。イマージョンクラスと普通クラスの比較したところ、低学年において差が

それほど大きくない。しかし、学年が進むにつれて、両クラスの中国語との接触量に差が大きくなり、イマージョンクラスの場合、普通クラスより有意に中国語の影響を受ける。

また、金(2009)で、イマージョンクラスの場合、高学年に進むにつれて、習得は進むものの4年生と5年生で誤用が多かったが、今回の調査でも、同じ現象が見られた。これは、数々の研究によって検証されている「トータルイマージョンの場合、一時的に教科の成績が下がる(中島和子、1998)」ことを支持する結果となった。幼少時の二重言語習得に向けて、もっと的確な教育が必要かと思われる。

本研究は、中国朝鮮族のバイリンガリズム研究の一分野として、言語学的観点から彼らの言語能力を分析し、中国朝鮮族のもっと的確で高レベルの二言語習得に寄与することを目標としている。

まず、第2言語習得が果たして第1言語に統語的影響を与えるかどうかということ明らかにする必要がある、現段階では、中国朝鮮族の朝鮮語使用の限られた助詞に絞って見てきた。その結果、中国朝鮮族は、L1である朝鮮語の使用において、L2で習得した中国語の影響を受けることを明らかにすることができた。今後は、本研究が考察した助詞以外に中国語の影響によると思われる助詞の誤用はないか調査を進める。また、イマージョンクラス、普通クラスの文法力だけでなく、会話力、認知力も調べることで、一般的言語能力において、L2の影響を受けるかをさらに深く調べる。最終的に、第2言語を習得することによって第1言語に与える影響についての従来の研究を参考に、他言語においても同じことが説明できるかどうかを理論的に結びつけることを試みる。

結論として、中国朝鮮族は、L1である朝鮮語の使用において、L2で習得した中国語の影響を受けることを明らかにすることができた。母語による第2言語習得への影響は様々な研究で検証され、それに適した教育方法も工夫されてきた。しかし、同時に、L2を習得することによるL1への影響もこれからのバイリンガルの研究においては重要な課題であり、L2習得に励みつつ、母語の保持にも力を入れ、バランスが取れたバイリンガルを育てることも重要な課題である。

**参考文献**

- 市瀬智紀 (2000) 「中国少数民族のバイリンガル教育の概観－その教育モデルと実践」『異文化間教育』14, 異文化間教育学会.
- 笠本美花 (2003) 「延辺朝鮮族自治州における民族区域自治の制度と実情(下)」『アジア・アフリカ研究』43(4), アジア・アフリカ研究所.
- 金 春香 (2009) 「第二言語習得による第一言語への統語的影響－中国朝鮮族をモデルに」『言語科学論集』13, 東北大学大学院文学研究科.
- 迫田久美子 (2002) 『日本語教育に生かす第二言語習得研究』アルク.
- 中島和子 (1998) 『バイリンガル教育の方法－地球時代の日本人育成を目指して』アルク.
- 이익섭 & 채완 (2007) 『국어문법론강의』学研社.